

漫画が教えてくれる、今できること

—しりあがり寿の漫画を読んで「とりあえず前を見る」—

小田 優佳

はじめに

現代の日本の文化を考えるうえで漫画は欠かすことのできないものになっている。漫画のアニメ化、映画化、書籍化、ゲーム化、そしてその登場人物のグッズ化など、もはやサブカルチャーの域を脱しているといえるかもしれない。

漫画の起源は平安時代の鳥獣画や江戸時代の北斎漫画など諸説様々であり、「漫画」という呼び名が北斎漫画由来であるのは確かであるが、それらが現代の漫画の直接のルーツとは考えにくい。しかし、江戸時代に花開いた庶民文化が現代の娯楽大国日本の大きな土台となっていることは間違いない。そして江戸時代というのは約 250 年間大きな戦争が起こることのなかった日本の歴史の中でも珍しい時代である。文化はこうした平和な時代に成長し花開く。平穏な日常があるからこそ、人々はその中に娯楽を取り入れより楽しく生きようとする。

戦後約 60 年間を通して平和であった日本に 2011 年 3 月 11 日、東日本大震災が訪れ、人々の日常が失われた。非日常を生きる人々に対して文化は何ができるのだろうか。そう考えた人は少なくないかもしれない。そして授業の中でこの問いを考える機会を手に入れた今回は、東日本大震災をうけて、漫画（漫画家）は何ができたのか、何をしているのかを見ていきたい。

具体的には、まず「小学館震災応援メッセージ 心は一つ～日本を信じよう～」というホームページに掲載されている漫画家による被災者に向けたメッセージを読み、そこに何か漫画家の特徴や共通点があるのか、またはないのかを探りたい。次に、そこで登場する漫画家たちと対比する形で、しりあがり寿という一人の漫画家について紹介したい。彼は震災直後から漫画を描き始めた（正確には震災の前と後とで変わらず漫画を描き続けた）漫画家の一人¹⁾である。彼のインタビューや作品から、なぜしりあがり寿は漫画を描き続けることができたのかについて考えていきたい。

漫画家たちからのメッセージ

(1) 文章における特徴・共通点

「小学館震災応援メッセージ 心は一つ～日本を信じよう～」²⁾ に掲載されているメッセージは長短さまざまであるが、全部で 169 ある。そのうちの 72 に共通して見られるものが「祈り・願い」である。「一日も早い復興を願っております。」「穏やかな日々が一日でも早く皆さんに訪れますように。」等のメッセージが圧倒的に多い。また「平穏な日々、日常、心安らげる日、笑顔、復興、復旧」という言葉が多用されている。

「祈り・願い」の次に多く共通していたことは「お見舞い」である。「東日本大震災によって被災された皆様へお見舞い申し上げます。」といった内容を含むメッセージ(多少言葉の使い方が違うものも含む)は 42 もある。

今述べた二つの共通点はメッセージの冒頭にあることが多く、伝えたいメッセージというよりは形式的な挨拶と言えらるだろう。また、メッセージのすべてがこの形式的な挨拶だけというものもあり、それらには少なからず素っ気無い文章であるという印象を受けた。

共通点は他にもある。「できることをします」というメッセージが 23 ある。私が知りたいのはそのできることの具体的な内容なのだが、そこには「微力ながら」や「できることは小さいですが」などの謙遜する表現が多くに伴っているものが多く、そして具体的な内容を示すメッセージはほとんどない。さらに注目したいのは、「漫画を描き続ける、漫画で役に立ちたい」といった漫画にまつわったメッセージがたったの 4 しかないということである。漫画家たちのメッセージばかりを集めたにしては少ない数字だと感じた。

(2) 絵における特徴・共通点

メッセージは文章と絵で構成されているものが多い。一番の共通点は「女性」である。描かれている人が女性一人であるものは 60、その他複数の人の中に女性が含まれるもの(男女、女性と動物など)は 43 あり、男性一人、男性と動物などというものが 4 しかないことと比べると圧倒的に女性が描かれていることが分かる。

ここでもう一つ指摘しておきたい重要なことは、絵がなく文章のみのメッセージが 38 もあるということである。漫画家のメッセージであるから絵が描かれているだろうと思っていた私にとってこの数字は驚くべきものであった。文章のみのメッセージは、彼らが漫画家であるという存在意

義がなくなってしまったかのようであった。

以上見てきたように漫画家のメッセージには共通点多々あった。しかし、それらは漫画に何ができるのかということを示すものではなかった。むしろ、形式的な挨拶の文章、金太郎飴を切ったかのように似通った構図の絵などからは、漫画には非日常を打破する力はなく、震災という出来事の前で漫画家たちは無力なのだということを示しているようにさえ感じられた。

では、漫画にはできることはないのだろうか。確かに多くの漫画家たちは自らの無力さに打ちひしがれたかもしれないが、そうではない漫画家もいる。それが次節以降で取り上げるしりあがり寿という人物だ。震災後出版された『あの日からのマンガ』³⁾という震災関連の作品ばかりを集めた漫画は飛ぶように売れた。人々は彼の漫画に何を見るのか、そしてなぜ彼は現在進行形の慎重に扱わねばならない震災という題材を漫画にすることができたのか。これについて、以下しりあがりのインタビューや作品を見ていく中で考えていきたい。

多くの漫画家たちとしりあがり寿の対比

(1) 望月寿城がしりあがり寿になるまで

しりあがり寿は1958年、静岡生まれ、本名は望月寿城（としき）である。3歳の頃から絵を習い始めた彼は、マンガ好きの父親の影響を受けて育った。高校では美術部に入りすぐに美大受験を決め、一年の浪人生活のち多摩美大へ通うこととなる。

「僕は、自分の絵は下手だと思っんです。ただ当時、ヘタウマブームが始まり、鼻っ柱をへし折られるどころか、増長した（笑）」とインタビューにこたえる彼は、美大卒業後キンビールへの就職という道を選択している。その訳を彼は「プロダクションに入ると忙しそうだし、メーカーの宣伝部ならマンガも描けそうだなと。マンガ家にはなりたかったですが、お金をもらわないといけませんから」と語る⁴⁾。

一方、マンガ連載の話が社会人になってすぐに、学生時代の彼の作品を見た出版社から持ちかけられた。彼は会社にばれないよう、ペンネームを縁起の良さと本名から「しりあがり寿」として創作活動にも勤しんだ。そして13年間のサラリーマンと漫画家という二足のわらじ生活を続けたのち、仕事に一区切りついた1994年に会社を辞め、漫画家一筋になることを決めたという。

このように、しりあがり寿のスタート地点は兼業漫画家だったのである。

このことはあとで紹介する彼特有の漫画に対するスタンスの根源といえるかもしれない。

(2) しりあがり寿のマンガに対する姿勢 —インタビュー記事と作品から

しりあがり寿の漫画、そして東日本大震災に対する考え方が多くの漫画家たちとは一線を画していることは彼のインタビューからも分かる。彼の震災漫画の中でも有名な「海辺の村」について語る中で、彼は漫画に対する思いを以下のように述べている。

僕に描けるのは、確かな数値でもないし、リアルな映像でもなくて、ふわっとした空気感だけ。だけど、逆に言えば、空気感を伝えることはできる。…漫画だから許されているところがあるなど。学者だったらもっと正確じゃないといけないし、小説だったらもっと完成度が高くなくちゃいけない。映画やアニメを作ろうとしたら時間もお金もすごくかかる。…漫画だから、そんな気負うことなくリアルタイムに対応できたし、深刻になりすぎずに受け止めてもらえた。そこが漫画のいいところだなんて思ったんですよね。⁵⁾

他にも、彼の漫画に対するスタンスのあらわれとして、「頭が先行したマンガは面白くないですから。言いたいことばかりプレゼンされてもね。いい作品は、そこからもうひとつジャンプしないと」⁶⁾と語っている。

こうしてみると、しりあがり寿が多くの漫画家とは何かが違うことが分かっていたただけだろうか。その違いとは漫画に対するある種の軽い捉え方である。普通漫画家が漫画を描くだけで食べていけるようになるには、何年もの辛くて苦しい下積み生活があるものだ。それゆえ漫画に対する思い入れが強く、漫画に込めたいメッセージも大きなものになるかもしれない。しかし、しりあがり寿は兼業漫画家からのスタートということからも分かるように、漫画というものをそこまで重くは受け止めていない。それゆえ今回の震災に際して、漫画に対する思い入れの強い漫画家たちが自分の漫画で人々に何をすることができるのだらうと悩み考えすぎて行動できない中、彼はある種の軽さを活かして、いち早く漫画を描くことができたのかもしれない。

しかし、彼が漫画をいち早く書けたことにはもう一つ、彼が漫画に込めるメッセージにも一因があるように思う。次の節では、しりあがり寿の震災に関する考え方を探っていきたい。

しりあがり寿からのメッセージ

彼の震災以前の作品の多くはメッセージを前面に押し出したものは少ない。しかし、震災をテーマにした彼の作品は少し趣が違う。彼自身もインタビューの中で、「いつもの僕の作品は、もう少しひねったり、いろんな意味にとれるように仕掛けをしたり、煙に巻くような作品が多いんだけど、今回、かなり剥き出しというか、ストレートです。だから単行本にするときに恥ずかしかった」⁷⁾と「海辺の村」が収録されている『あの日からのマンガ』を語る中で述べている。それでは彼の震災漫画では何が剥き出しになっているのだろうか。

ボクがあの日の中で、ちょっといいなと思ったことがある。あの日、いつもは下を向いて身近な日常しか見ていなかった人々が一斉に顔をあげ、遠くの自分たちの未来をしっかりと見つめようとしていた。たくさんの人が日々の些事から離れ、不安の中で目を凝らしてこれからやってくる何かを見ようとした。⁸⁾

これは『みらいのゆくすえ』という彼のエッセイ集の中の一文である。震災に関して大多数の人々が負の思いしかない中で、彼はちょっといいなと思えることを見つけたという。他にも同じようなことを別の場でも発言している。

それまで些細なことに一喜一憂していた人々が、みんな一斉に顔をあげ、自分たちが生きている世界の未来を見ているように僕には感じられたんです。震災という悲惨な出来事がきっかけではあったけれど、自分たちの世界の遠い未来や、東北のことなど、これまで自分には関係ないと思っていたいろんな物事に多くの人々が思いを馳せている状況は、決して悪いものじゃないと思いました。⁹⁾

このように彼は震災という悲しい出来事の中に、人々が顔を上げ遠い未来を見つめているという状況を見出している。これは震災以前から彼が漫画で表現してきたものの延長線上にあるのではないだろうか。

多くの漫画家は日常と完全に切り離された非日常を描くか日常そのものを描く場合が多い。例えば今大人気の尾田栄一郎『ONE PIECE』（集英社）では完全な非日常の冒険物語を描いているし、椎名軽穂の『君に届け』（集英社）では逆に学生の日常が描かれている。しかし、しりあがり寿はそのどちらにも属さない。日常と隔離された世界でもなく、日常そのもので

もない、日常と地続きになっている「遠くの日常」を描いているのである。例えば、自著『表現したい人のためのマンガ入門』の中で自らの作品『真夜中の弥次さん喜多さん』について、「夢と現実の境界で物語りは生まれる」や、「デタラメを追い求める」、「シュールのなかのリアル」¹⁰⁾と様々なキーワードが述べられている。日常ではあるのだが、それが遠くにあるために私たちは普段そこへは目を向けない。だから彼の漫画でそれを目にしたとき、完全なファンタジーとしても受け止められないし、しかし完全に自分のこととも捉えられないような不思議な世界へと誘われるのだ。

そして彼は、平和な日々が続いていた震災前に圧倒的な悲劇や滅びを描くことで、このままでは世界は滅びるかもしれない、というメッセージを送り続けていた。2005年に出版されている『Jacaranda<ジャカランダ>』¹¹⁾という彼の作品はそのメッセージがよく伝わってくる。突然東京に巨大な木が出現し、人々や街を滅ぼしてゆく、そして人々は自然の驚異にひれ伏すという内容である。しかし震災が起こり、悲劇や滅びが人々の近くにやってきて身近な日常となってしまった。だからこそ彼は今度は、遠く離れてしまった希望という日常を描くことにしたのかもしれない。そして人々に「遠いけれど希望は必ずある」と伝えたいのではないだろうか。

「海辺の村」の中に翼の生えた子供たちが、福島第一原発の跡地に立ち並ぶ風力発電施設を見下ろすという迫力のあるシーンがある。



「海辺の村」より（前掲『あの日からのマンガ』 pp. 28-29）

この作品もまた、現在と地続きの未来を描いているかと思うと、翼が生えた子供たちが突如登場するという、言葉で書くとファンタジーめいた作品だ。しかし、翼が生えている以外には子供たちにはファンタジーめいたところはなく、普通の子供が描かれており、そこにはしっかりと、遠い日常と彼らに託された未来の希望が描かれている。

彼は「震災はひどいことでもあったけれど、チャンスと捉えることも可能」¹²⁾と語っている。このような大胆な発想も、近くの悲劇ばかりに目を向けず、遠くの希望を見据えて漫画を描くからこそ考え付くものであるのだろう。彼は私たちにメッセージを送っているのだ。「あのとき上げた顔を下げちゃいけない」と。そして彼自身「顔を上げて漫画を描きたい」と。

おわりに

復興が思うように進まず、被災地の人々は未だ苦しみの中にいる。しかし人々の関心が薄れてきているように感じる今、漫画を描くことで私たちに何かを伝え続けてくれるしりあがり寿は、とても貴重な存在だ。彼や彼の作品は「文化に何ができるのか」などという大きすぎることを考える前に、することはたくさんある、とりあえず前を見ろ、前を見て日常を歩け、そして未来へ進め、そんなことを教えてくれたように私には思えた。

『海辺の村』の最後のシーン、昔（漫画は50年後の設定であるから昔といっても現代のことである）の豊かな生活を知っていて、常々今の生活に不満をもらしていたおじいちゃんが、目に涙を溜めながら、「じゃが、わたしの時代には…こんなキレイな星空はなかったけどな」と呟く。夜空に小さいながらも強く光り輝くあまたの星は、不安の中でも消えずにしっかりとあり続ける希望そのもののようだ。

注

- 1) 彼は震災直後も朝日新聞の連載漫画を描き続けている。詳しくはしりあがり寿『「あの日からのマンガ」発売記念インタビュー』『日刊サイゾー』
http://www.cyzo.com/2011/08/post_8253.
- 2) <http://comics.shogakukan.co.jp/1kyoku/o-en.message>。このホームページは随時更新されているため、この数字は私が調査を行った2013年1月現在のものである。
- 3) しりあがり寿『あの日からのマンガ』2011 エンターブレイン
- 4) 以上「シリーズ人間」『女性自身』2011. 12. 27, p65

- 5) 「特集 3・11 後、作り手の課題 漫画だからできることがある」『熱風』
2011. 10, p20
- 6) 前掲『女性自身』 p68
- 7) 前掲『熱風』 p21
- 8) しりあがり寿「二〇一一気になる八つのニュース」『みらいのゆくすえ』
2011. 12 春風社 p24
- 9) 前掲『熱風』 p20
- 10) しりあがり寿『表現したい人のためのマンガ入門』2006 講談社現代新
書。引用は順に p171, 173, 174
- 11) しりあがり寿『Jacaranda<ジャカラнда>』2005 青林工藝舎
- 12) 前掲『女性自身』 p68

しりあがり寿について色々調べていたが、彼は自分のことをヘタウマブームに乗って増長したと表現している。確かに彼の絵はお世辞にもウマイとは言
い難い、、が、ヘタとも言い難い。そんな不思議な魅力を持つ絵に虜になる人
は多く、そのうちの一人が私だ。皆さんも虜になってみませんか？

小田優佳

